A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

38

ブレヒト

三文小説　菊盛英夫・岩淵達治訳

三文オペラ　内垣啓一訳

中央公論社

新集 世界の文学 38 ©1969

ブレヒト

訳者 菊盛英夫
岩淵達治
内垣啓一

昭和44年12月5日初版発行
昭和49年7月15日再版発行

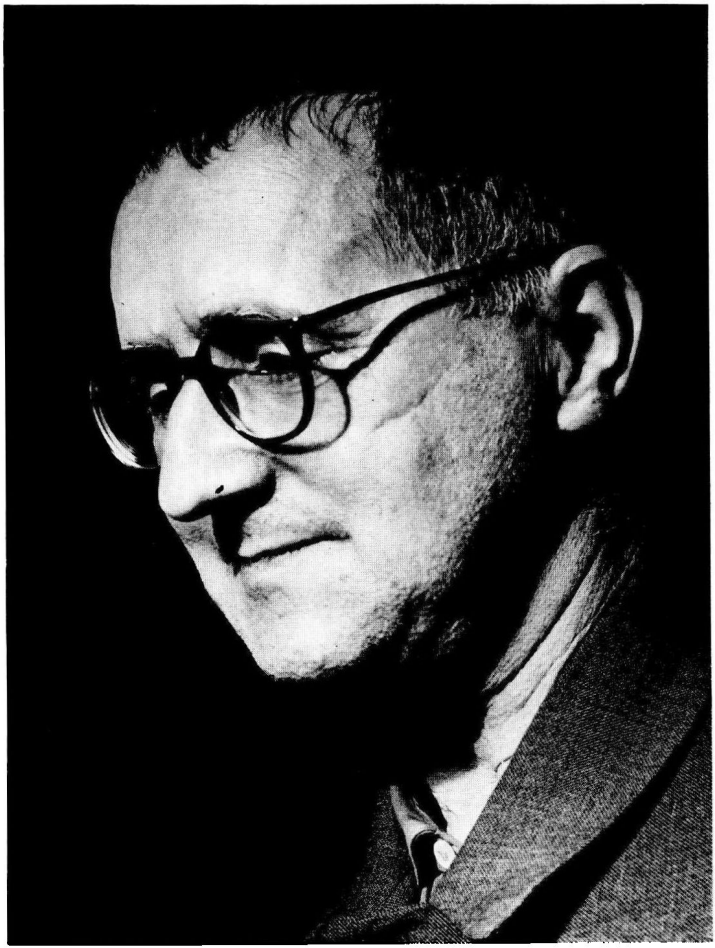
発行者 高梨 茂

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

ロンドン，ソホーの裏街　世界に名高い夜の歓楽街ソホーは，華々しい享楽のうらに非情なまでの人生の素顔を示している。裏街にうごめく乞食，泥棒，そして娼婦。『三文小説』『三文オペラ』の舞台は静かに幕をあげる。　（撮影・稲生　永）



ブレヒト

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

目次

三文小説　3
三文オペラ　403
作者の覚書より　481
解説　490
年譜　511

三文小説

ねぐら

きゃつは施しものは遠慮なく貰った、なにしろ
貰っておいて言ったもんだ（なぜってやつは馬鹿じゃなか
ったから）
「なんでおれにねぐらを貸すんだね？　なんでおれにパン
なんか恵むんだね？
全くさ、おれをどうしようっていうんだね？」
（古代アイルランドの譚詩「アイギーン卿の没落*」）

ジョージ・フュークムビイというひとりの兵卒が、南阿戦争（イギリスとトランスヴァールおよびオレンジ自由国の戦争、一八九九～一九〇二）で足に弾丸をぶちこまれ、結局ケープタウンの病院で下肢を切断される羽目になった。彼はロンドンに帰って、七十五ポンドの金を支給され、その金と引き換えに、今後国家に対しては一切の請求権を放棄するという一札に署名した。その七十五ポンドを、彼はニューゲイトのけちな居酒屋に投資した。彼が帳簿で、といっても鉛筆書きの、ビールでしみだらけの小さな大福帳だが、その帳簿で確かめたところによると、この居酒屋は、このところ、週にたっぷり四十シリングは利益をあげているのだった。

彼は店の狭苦しい裏部屋に引き移り、ある婆さんと共同で居酒屋稼業を二、三週間続けてみたが、なくした自分の足が、それほどの利益をあげるものではないということを思い知らされた。手を抜いて客あしらいを粗末にしたわけではないのに、収入は四十シリングをはるかに下まわった。聞いてみると、さきごろ、この地区で建築工事が行なわれていて、それで左官屋たちが居酒屋のいいお顧客になっていたのだが、もう今では工事も終わって、常連で賑わう時期もおしまいになったという話であった。ひとに教えられるまでもなく、帳簿を見れば新しい買い手である彼にもそんなことはたやすくわかったはずだ。なぜなら、一切の接客業の経験の教えるところに反して、この居酒屋では、ウィークデーの収入のほうが日曜祭日より多かったからである。ところがこの男は、それまでこういう類いの居酒屋の客になったことそあれ、亭主になった経験はなかったのだ。

* これはブレヒトの創作である。ブレヒトの最初のペンネームはオイゲンであるが、これは当時ブレヒトの生地アウクスブルク地方ではアイギーンというように発音された。それをもじってこのもっともらしい詩の題名に選んだ。別に「アイギーンの譚詩」という未完の詩もある。

きっかり四ヵ月はともかく店をもちこたえた。前の持ち主を捜し出すためにさらにいくらかの時間をむだにしたあげく、とどのつまりは文なしで街頭に放り出される羽目になった。

当座しばらくは、出征中の兵隊の若い女房のところにころがりこんで、女がちっぽけな店の番をしているあいだ、その子供たちを相手に戦争の話をしてやって食わせてもらっていた。そのうち、女の亭主から、休暇で帰郷するという手紙がきた。こういう狭い住居ではえてしてそうなるものだが、彼女もいつかこの居候の兵隊と寝るようになっていたから、こうなるとできるだけ急いで彼を追い出したいと思った。彼はそれでも二、三日はぐずぐずしていたが、結局は出ないわけにはいかなくなった。亭主が帰ってきてからも、まだ何回かは女を訪ね、食物を恵んでもらったりしたが、あとは落ちぶれるばかりで、ついには夜昼となく、この世界の首都の通りを飢えに追われて流れてゆく、悲惨な貧者の果てしない群れの仲間入りをする身となった。

ある朝、彼はテムズ河にかかる橋の一つにたたずんでいた。この二日というもの、まともなものは口にしていなかった。古ぼけた兵隊服を着た彼が、居酒屋ですりよっていった連中は、いくらかの飲み代は払ってくれたが、食べ物まではくれなかったからである。兵隊服を着ていなければ飲み代だって払ってもらえなかったところだ。だからこそわざわざそいつを着こんでいったのである。

今はまた、飲み屋の亭主時代に着ていた背広で歩いていた。今度は乞食をしてみようと思ったからであるが、心の中では深く恥じていた。足に一発弾丸をくらったことや、割にあわない店を買ったことが恥ずかしかったのではない。恥ずかしいのは、自分にはもう赤の他人から金をせびりとるしか道が残されていないことだった。彼の信条によると、だれでもお互いに貸し借りはないはずだからだ。

物乞いは彼にとってなまやさしい仕事ではなかった。これは何ひとつ手に職をつけなかった連中のする職業だった。ただこの職業にもどうやら身につけるための修業がいりそうに見えた。彼は通りかかる何人かの人に次から次へと言葉をかけてみた。しかし顔にはわざと人を見下すような表情を浮かべ、声をかけられた人に煩わしく思われぬために、行く手をさえぎるようなことはしないように心がけた。しゃべる文句もかなり長いのを選んだので、しまいまで言うころには肝心の相手はとっくに通り過ぎていた。手を差し出すようなこともしなかった。そんなわけで、彼はもう五回もへいこらしてみたつもりなのに、乞食に物乞いされていることに気づいた相手はひとりもいないようだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

ところがそれに気づいた別の男がいたようだ。突然、後ろからしゃがれた声でどなりつけられたのだ。「とっとここから消えて失せやがれ、この野郎め！」彼自身にも後ろめたい気があったので、振り向くこともせず、肩をすぼめて、そのままさっさと歩きだした。およそ数百歩も歩いたあとで、やっと勇気を出して振り返ってみると、ひどいぼろを着た最低の乞食がふたり並んでこっちを見つめていた。彼がまたびっこをひきひき歩きだすと、ふたりはあとをつけてきた。

いくつかの通りを過ぎてから、ようやくもうだれにもつけられていないことがわかった。

翌日、彼がドックのあたりをうろつきまわり、あいかわらずおりをみては下層階級の連中に声をかけて相手をびっくりさせていると、だしぬけに背中をどやしつけられた。なぐったやつは、いきなり彼のポケットになにやら突っ込んでいった。彼がまわりを見まわしたときには、もう人っ子ひとりいなかったので、ポケットから、幾重にも折りたたんである、ひどく汚れた名刺ふうのカードをひっぱりだしてみた。カードには、オールド・オーク街七番地、J・J・ビーチャムと刷りこんであり、その下に、鉛筆でこうなぐり書きしてあった。「てめえの身がかわいかったら、この上書きのとこへ出向いてこい！」アンダーラインがごていねいに二本もひいてあった。

フュークムビイにも、おぼろげながら、あんな不意打ちをくらったのはきっと自分の物乞いとつながりがあるにちがいないということがわかってきた。とはいっても、わざわざこちらからオールド・オーク街まで出かける気にもなれなかった。

その日の午後、彼はとある立飲みビアホールの前で、ひとりの乞食に呼びとめられた。それがこのあいだのふたりの片割れであることにすぐ気がついた。今日は見てくれもそれほどひどくはなさそうだし、まだ若い男だった。根っからの悪党でもなさそうだ。男はフュークムビイの上着の袖をつかんで、手もとに引きよせた。

「おいこの薄汚ねえの」となれなれしい声で落ち着き払って言った。「おめえの番号を見せてみな！」

「なんの番号だい！」と廃兵はきき返した。

フュークムビイと肩を並べてぶらぶら歩きながら、前よりもっとなれなれしく、しかし彼から一刻も目を離さずに、若い男はこうした手合いの仲間うちの言葉で説明した。フュークムビイのはじめた新しい商売にも、ほかの商売同様、いやそれ以上に立派な秩序というものがある、彼は文明人から見捨てられた野蛮な地方にいるわけではなく、秩序整然たる大都会、世界の首都にいるのだ、したがって新しい職業の店びらきをするには、番号、一

種の営業鑑札のようなものが必要である、そいつはどこそこへ行けば貰える――もちろんただで貰えるもんじゃないが、オールド・オーク街に本店のある組合があって、正規には彼もそこに所属しなければならないはずだ、という話だった。

フュークムビイは一言もきき返さずに耳を傾けていたが、やがておもむろに、同じようななれなれしさで――彼らは人通りの多い通りを歩いていた――答えたものだ。左官屋や床屋も顔まけのそんな組合があるのは大いにうれしいことだが、しかしおれとしては自分の好きにやっているほうがいい、なにしろこれまでの生涯ではどっちかといえば一事が万事ああしろこうしろと決められたことばかりたくさんやってきたのだ、それはこの木の義足を見ればすぐおわかりだと思う、と。

そう言って彼は、ついてきた男に別れの手を差し出した。相手はそれまで、人生経験ゆたかな男からたいへん興味のあるご高説を拝聴していながら、さりとてすっかりそれに同意もできないといったような顔つきをして彼の言い分を聞いていたが、そこで古くからの知り合いにでもするように笑いながら彼の肩をぽんとたたき、往来の向こうへ渡っていった。フュークムビイにはその笑いは気色が悪かった。

それからの数日、事態はますます悪化していった。

いくらかでもきちんきちんとお布施にありつくためには、きまった場所にすわっていなければならない（しかもその場所には良し悪しがある）ということがわかってきたが、彼にはそうはできなかった。いつでも追っ払われてしまうからだ。ほかの連中がどうしているのか、かいもく見当がつかなかった。彼らの着ているものは、まさに本物のぼろであって、骨まで透けて見えるのだ（あとになって彼にもわかったのだが、この種の仲間のあいだでは、肉体の一部がのぞけないような着物は、一面に紙を貼りつけてしまったショーウインドーみたいなものだと見なされていた）。それに体の外見ももっとひどかった。彼なんかとは比べものにならぬほどすさまじい片端者も多かった。たいていのやつらは冷たい地面に何も敷かないですわっていたから、通行人は、これじゃ病気にならないはずがないと思いこんでしまうのだった。フュークムビイだって、できることなら、冷たい地べたにすわっていたかったのだが、こうしたあわれみの心を十分に誘うものすごいショバは、だれでもすわれるというわけではなさそうだった。そこにいると必ず警官や乞食に追っ払われた。

こうした苦労が重なったあげく、とうとう彼は風邪を引きこみ、それがこじれて肺にきてしまい、胸に刺すような痛みを覚え、高熱にうなされながらあたりをうろつ

きまわっていた。

ある晩のこと、彼はまたもや例の若い乞食に出くわした。男はすぐに彼のあとをつけだした。通りを二つ過ぎると、もうひとりの乞食が加わっていた。彼が走りだすと、ふたりも走りだした。

彼は、ふたりをまくために、狭い路地をいくつか曲がった。もうこれで大丈夫だろうと思ったとき、とある街角から突然そのふたりがぬっと姿をあらわして、彼が相手をよく見定めるひまもないうちに、棒でなぐりかかってきた。ひとりのほうは、舗道にころがりこんで彼の義足をタックルしたので、彼はあおむけにひっくり返って後頭部を打った。だが次の瞬間には、ふたりはさっと手を引いて雲を霞と逃げていってしまった。ちょうど警官がひとり街角を曲がってきたのだ。

フュークムビイは、きっとこの警官が助け起こしてくれるだろうと思った。そのとき、彼のすぐわきの家並みの入口と入口のあいだのくぼみから、別の乞食が小さな車椅子に乗ってあらわれて、興奮しながら、逃げていった連中のほうを指さして、がらがら声で何かを警官に説明しようとした。フュークムビイが警官にひっぱり起こされ、蹴とばされて前につんのめってからよろよろと歩きだすと、乞食は両手で鉄の車椅子を漕ぎながら、ぴったりと彼のあとをつけてきた。

乞食は両足ともないようだった。

次の街角までくると、この足のない男はフュークムビイのズボンをつかまえた。彼らは、いつかひどく汚ならしいスラム街に来ていた。路地の幅はといえば人間ひとりがやっとというところで、彼らのわきに、日もささぬ中庭に通じる低い通路の入口がぽっかりと口を開けていた。「こんなかへ入れ！」と片端の乞食はだみ声で命令するがはやいか、わきに鋼鉄製の支柱のついている車椅子をフュークムビイの足の脛めがけてぶつけてきた。空腹で弱っていた彼は、ひとたまりもなく中庭に突っ込まれたわけである。中庭といっても三メートル四方もあるかなしだった。不意をくらってびっくりした廃兵がきょろきょろまわりを見まわしていると、顎がひどく張った中年のこの片端は、猿のようにすばしっこく椅子からとびおり、いつのまにかびんびんした二本の足をそなえて、やにわに彼にとびかかってきた。

背丈はフュークムビイよりもたっぷり首だけ高く、両の腕ときたらオランウータンも顔まけだった。

《上着を脱ぎな！》と彼は叫んだ。《正々堂々とおれと戦って、あの収入のいいショバをおれから取りあげるだけの力がおめえにあるかどうか見せてもらおうじゃねえか。「強えやつには道をあけろ！」「負けたやつは災難！」てえのがおれさまの掟だ。こういうやり方が全人

類のためになるんだぞ。なぜって強えやつだけが偉くなって、三千世界のいいものをみんなひとりじめにしちまうことになってるんだものな。ところで汚ねえ手は使うなよ、ロウ・ブロウや首筋のパンチはいけねえ、肘を使うのもご法度だ！　勝負でけじめをつけるからにゃ、大英ボクシング連盟規則に従ってやんなきゃなんねえ！》

勝負はあっけなくついた。身も心も打ちのめされて、フュークムビイは、このおっさんのあとをこそこそついていった。

オールド・オーク街の話はもうそれっきりであった。

一週間のあいだ彼は、このおっさんの厳重な監視をうけた。ともかく彼は、きめられた街角に立たせてはもらえた。ふたたび古い兵隊服を着こんでであった。晩になってあがりの勘定を済ませると、飯を食わせてくれた。

彼の稼ぎはいつも、最低線をもっと下まわるものだった。稼ぎはそっくりおっさんに渡すことになっていたが、毎日の主食である揚げにしんとカップ一杯の安物のジンさえ、自分の稼いできた銅貨二、三枚ではたしてまかなえるかどうか自信のないときが多かった。片端のなりは彼よりずっと堂に入っているが、実際は五体健全なおっさんのほうが、彼よりははるかに上玉のお顧客をもっていたのだ。

時がたつうちに廃兵は、親方は自分の向かい側の橋の上の場所さえ占領されていればよかったのだということに思い当たった。主たる収入源は、この場所を必ず同じ時刻に、午前中とか、朝勤めに出るとき、あるいは夕方の帰宅時間に通りかかる人たちであった。彼らは日に一度だけ施しをし、普通はいつも必ず通りの同じ側を通るが、場合によってはひとしきり同じ側を歩く日が続くと急に反対側に変わることもある。要するに、この連中だって決してすっかり当てにするわけにはいかないのだった。

フュークムビイは、今度ありついた口で暮らしは前よりましになったが、それでもまだまともではないような気がした。

一週間が過ぎたころ、おっさんはどうやら彼のことがもとで、オールド・オーク街の怪しげな組合から警告をうけるようになった。ある朝早く、ふたりがねぐらにしているボート小屋を出かけようとしたとき、三、四人の乞食が襲いかかり、ふたりを引きずっていくつかの通りを過ぎ、小さな、話にならぬほど汚ならしい店構えの家に連れ込んだ。店の看板には「楽器商」と書いてあった。

虫の食ったカウンターの後ろに、ふたりの男が立っていた。一方の、小柄でひからびたほうは実に下品な顔つきの男で、昔は黒かったと思われるズボンをはき、同じように羊羹色のチョッキをつけた上着なしのシャツ姿で、

べこべこになった山高帽をあみだにかぶり、両手をズボンのポケットに突っ込んでショーウィンドー越しに外の陰気な朝の眺めをじっと見つめていた。この男は振り向きもせず、何が起こってもまるで関心をもたないようだった。もうひとりは太っちょで、ゆでだこのように真っ赤な顔をして、ひょっとするとはじめの男さえ顔まけのいやらしい感じを与えた。

「こんちわ、スミシィ旦那」とその男はどうやらおっさんを小馬鹿にしたような挨拶をし、トタン張りのドアを通って奥の部屋に入っていった。おっさんは、おどおどとまわりの様子をうかがっていたが、それからお迎えに来た連中といっしょに、その男についてなかに入った。彼の顔は土気色になっていた。

フュークムビイだけが、まるで目こぼしにあったように、狭い店に取り残されて立っていた。壁には、でこぼこになった古トランペットとか、弦のないバイオリンとか、古色蒼然とした手回しオルガンなど、申しわけほどの楽器がぶら下がっていた。商売はどうやら左前のようだった。楽器には厚いほこりがかぶさっていた。

フュークムビイは、あとになって、この七、八挺のやくざな楽器などは、彼のやってきたこの店ではたいした役目は果たしていないことを知るようになった。この家の、窓二つ分しかない狭苦しい構えからは、その奥に広い隠れた建物があるなどとはとんと想像もつかなかった。がたぴしする現金入れの引き出しのついたカウンターも、この家の正体については何も語っていなかった。

三軒のひろびろとした家屋と二つの中庭を収めたこの古い建物のなかには、六人のお針女が仕事している仕立工場と、同数ぐらいの粒選りの職人の働く靴工場があった。なかでも特筆に値するのは、この建物のどこかに、ゆうに六千人の男女の名前の載ったカードを収めた登録室があったことである。この連中は、この家の屋台骨を支える名誉を担っていたのである。

まだ廃兵には、この変てこな、いかがわしい商売がどんなふうに運ばれるのか全然見当もつかなかった。そいつをのみこむまでにはなお数週間が必要だった。彼はすっかりへたばっていたので、このうさんくさいが強力な組織の一員になれば悪いことはないだろうと観念したのである。

フュークムビイの最初の養い手であったスミシィ旦那は、この日の午前中はもう姿をあらわさなかった。その後も彼の姿を見かけたのはせいぜい二、三回で、それも遠くからちらと見ただけだった。

しばらくしてから、太っちょの男が、トタン張りのドアをほんの隙間だけ開いて、店のほうに向かって叫んだ。

「ほんものの木の義足ですぜ」

小柄だが親分らしいほうの男が、フュークムビイに向かってつかつかと歩みよりざま、さっとズボンをつかむと木の足を見るために裾をまくりあげた。それから彼は両手をまたポケットに突っ込んで、霧で曇った窓のほうにもどり、外を眺めながら低い声で言った。

「何がやれるのかね？」

「能なしでさ」と廃兵も同じように低い声で言った。

「乞食をしていまさあ」

《だれだって乞食はしたがらあな》と小柄な男は、そっちを見もしないで小馬鹿にしたように言った。《あんたの片っぽの足は木だ。木の足をしてるからっていうだけで、大威張りで乞食ができるつもりかい？　へーん、でもあんたの足ってえのは、戦争でお国のためになくしたんじゃねえのか？　だったらなおさら具合がよくねえんだぜ！　だれだってそんな目にはあうことがあるんだからな！　あたぼうよ！　（陸軍大佐でもありゃ別だがね）足をなくしたとなりゃ、だれでも他人様のお情けにすがるかね？　そりゃたしかだ！　だけどな、進んでひとになんかをくれてやりたがるやつなんかひとりもいねえってのもやっぱりたしかなことだぜ！　戦争ってのは例外に入るんだ。大地震が起こったってときなら、こりゃだれの責任でもねえ。愛国主義者の愛国心てやつによって生みだされるぼろ儲けの話なんぞはご存じねえような面をしやがってさ！　はじめはだれだってみんな自分から志願しやがるくせに、それで足を一本なくしたとなると、おれはむりやりひっぱられたのだなんぞとほざく！　もちろん、ビール運搬の馬車屋が、てめえの稼ぎで、つまりビール運びをやってるときに足を一本なくしたくせに、どこそこの戦いでやられたなんて大嘘をでっちあげる始末だが、こんなのは問題外だとしてだぜ！　もう少し言わせてもらおう。肝心要なことだが、祖国のために戦争に出かけるってことがなぜたいした手柄になるんだい、この勇敢な兵隊たちが、たっぷり名誉をさずかったり、賞賛をあびせられたりするのはなんのせいなんだい、片足をなくすからこそじゃねえかよ！　そりゃなくすかもしれねえっていうちょっとした危険はあらあな、いやさたいした危険と言ってもいいや、もしこの危険がねえとしたら、全国民がそんなに深い感謝を捧げるわけがねえじゃねえかよ？　結局のところは、あんたは反戦のデモンストレーションをやってることになるんだぜ、違うって言ったって通らねえや！　あちこちの角に立って、そのすりこ木みたいな足を神妙に隠そうともしねえんだから。とすりゃあんたは「ああ、戦争とはなんと恐ろしいものでしょう、戦争でこうして片足を失うものもいるのです」と訴えるつもりだってことになるんだ。恥を知れってことよ！　戦争は恐ろしいもんでもあるが、必要な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook